

氏名

石 田 香 士

学 位 の 種 類

医 学 博 士

学 位 授 与 番 号

乙 第 1310 号

学 位 授 与 の 日 付

昭和57年9月30日

学 位 授 与 の 要 件

博士の学位論文提出者（学位規則第5条第2項該当）

学 位 論 文 題 目

体性感覚誘発電位の発達に関する研究

論 文 審 査 委 員

授 授 堀 泰 雄 教 授 中 山 沢 教 授 大 月 三 郎

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

小児期の中枢神経系の発達過程を客観的に評価する目的で新生児から成人までの健常人158例について体性感覚誘発電位(SEP)を検討し、以下の知見を得た。

- 1) 新生児期のSEPにおいてもすでに成人と同数の8個の頂点が認められた。新生児以後、年齢の増加とともに波形は発達的変化を示したが、6才以後の小児における波形は成人と同様な形態を示した。
 - 2) N₁潜時は生後4カ月までに急速に短縮し、6-9歳群で最短となり、それ以後、年齢増加とともに成人期まで延長傾向を示した。
 - 3) 後期成分の潜時は生後2-3カ月で著明に短縮した。従ってSEPは乳児早期の発達を評価する有用な方法であると考えられた。
 - 4) 小児におけるSEPの振幅は一般的に成人に比し高振幅であった。各振幅はそれぞれ異った年齢で最大振幅を示すが、全ての振幅は9歳以後経年的に減少傾向を示した。
- 以上の知見はSEPが中枢神経系の機能的な発達を客観的に評価する有用な方法であることを示しており、各年齢群における著者の計測値は臨床的に標準値として応用されうると考える。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は従来研究報告の少なかった体知覚性誘発電位の発達過程を系統的に研究し、臨床診断に応用しうる記録法を確立し、また小児中枢神経系の発達を示す他の神経学的指標と比較検討して、体知覚性誘発電位各成分の頂点潜時の変化が小児神経系の発達とよく相關することを明らかにしたほか、いくつかの興味ある成績を得

た。これは小児科学の領域で重要な新知見を加えたもので、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。